

## 【表現学関連分野の研究動向】

## 日本語教育

梶原 彩子

『日本語教育』184号では「ともに学び未来を描くキャリア形成の現場」という特集が組まれている。自治体・小中学校・高校・大学等多様な現場の学習者のキャリア形成の取り組みに関する論文に加え、海外の日本語教育人材に関する論文(古川嘉子「東南アジア5か国比較と調査に見るフィリピン人日本語教師のキャリアと成長」)も掲載されている。古川論文では、質問紙とインタビューによる調査を行い、フィリピン人日本語教師のキャリア形成を制度面と教師個々の認識から記述し、日本語教師の「専門性の三位一体モデル」に基づく振り返り、公的機関による継続的な教師養成・研修の実現の重要性を指摘している。

国内の日本語教育人材の養成に目を向けると、2024年から登録実践研修機関・登録日本語教員養成機関の登録が開始されるという大きな動きがある。養成機関は登録申請に向けて準備を進めるなかで、新制度の枠組みに沿った教育実習の実施に向けた対応も進めている。このような状況の下で、文化審議会国語分科会(2019)「日本語教育人材の養成・研修の在り方について(報告)改訂版」(以下、「報告」)で分類、定義された段階的区分(養成・初任・中堅)の専門性を持つ日本語教育人材に求められる資質・能力、養成・研修に関しても、活発に議論されている。

そこで、養成段階の大学における日本語教育実習の実践研究に注目したい。大河内瞳・樋口尊子「日本語指導が必要な児童生徒を対象とした日本語教育実習と実習を通じた大学生の学び」(『日本語教育』185号)では、日本語指導が必要な児童生徒を対象に教育実習を行い、見学記録とレポートに記述された大学生の学びや気づきが「報告」の養成・初任に求められる資質・能力と重なっていたという。『大学日本語教員養成課程研究協議会論集』第20号は、日本人大学生・留学生の意識変容の調査から、「報告」の技能面や態度面の資質・能力を涵養させるという点で教育実習の意義を示した調査・実践報告(山下順子・道法愛・永田良太「日本語教育実習を通じた「日本語教師に求められる資質・能力」の変容—日本人学生と留学生の自由記述データの比較—)、教育実習を行った大学生の気づきの分析から「報告」の資質・能力の有効性と限界を示した論文(千々岩宏晃・松岡里奈「大学の日本語教育実習で学ばれる資質・能力は、準拠枠としての「資質・能力」リストとどの程度一致し、何が含まれないのか」)を掲載している。養成機関がどのような理念の下で、日本語教育人材に必要な資質・能力をどのように身に着けさせていくのかが問われるなか、これらの研究は、大学で日本語教員養成に携わる教員に大きな示唆を与えてくれるものである。

2024年度以降は、養成段階の日本語教育人材に求められる資質・能力、その養成方法に関して、新制度下の教育実習からの検討・検証が行われていくことになるだろう。今後も実践と研究の往還が活発に行われることが期待されている。

(国士舘大学)